

謙讓の補助動詞についての一考察

国文学科四年 今村 順子

序論 (省略)

[表1]

合計	まめらす	まうす	たてまつる	きこえさす	きこゆ	語	作品
2970	1	53	1386	106	1424	数	源氏物語
	0.03	1.8	46.7	3.6	47.9	%	
227	2	3	166	6	50	数	落窪物語
	0.9	1.3	73.1	2.6	22.0	%	
96	6	10	51	4	25	数	枕草子
	6.3	10.4	53.1	4.2	26.0	%	
111	107	/	4	/	/	数	讃岐典侍日記
	96.4	/	3.6	/	/	%	
304	39	31	231	/	3	数	宇治捨遣物語
	12.8	10.2	76.0	/	1.0	%	

※ %は、各作品に於ける各語の占める割合。

本論

第一章 使用状況

第一節 各々の語の各作品に於ける概観

各作品において、謙讓の補助動詞がどのように用いられているか、その概観を計量的にわかりやすく示したのが、表1である。

先ず目につくのは、『源氏物語』（以後『源氏』と示す）に於ける使用頻度数の多さである。作品の量の違いはあるにせよ、注目すべき事実である。

さらに作品どうしを比較し易いように、各作品の動詞全体に対する各語の割合をまとめたのが表2である。これでも『源氏』が四三・四%と最も多い割合を示している。また、『讃岐典侍日記』（以後『讃岐』と示す）も四〇・四%と使用頻度数は一一一語であるが高い割合を示している。

これは、『讃岐』は、堀河・鳥羽帝という二代にわたる宮仕えがその内容となっているために、『源氏』については、多

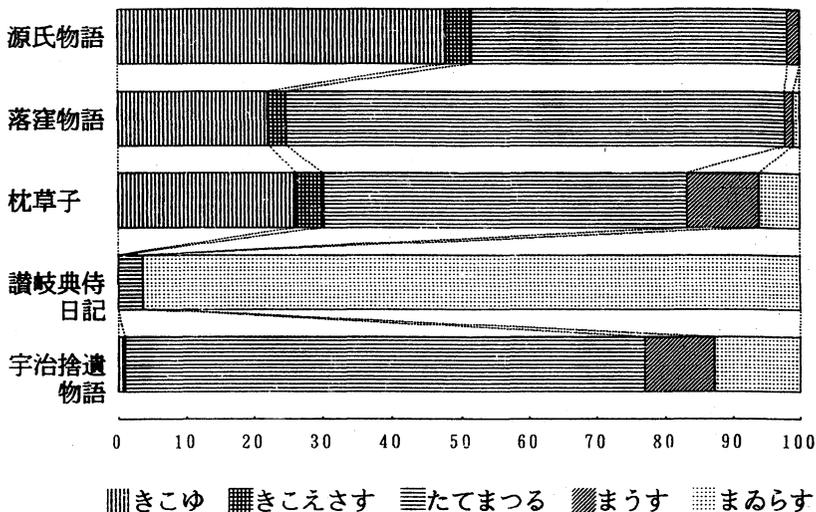
くの登場人物を配して、その人間関係をはつきりさせるために、やはり敬語の使用は不可欠で謙譲の補助動詞も多く使用されたと思われる。
 次に、表1にあわせて図1を見てもらうとよくわかるとおもうが、『源氏』『落窪物語』（以後『落窪』と示す）『枕草子』（以後『枕』と示す）においては、「きこゆ」「きこえ

[表2]

まのらす	まうす	たてまつる	きこえさす	きこゆ	五語の合計	動詞合計	語	作品
1	53	1386	106	1427	2970	68,427	数	源氏物語
0.01	0.8	20.3	1.5	20.8	43.4	1,000	%	
2	3	166	6	50	227	11,708	数	落窪物語
0.2	0.3	14.2	0.5	4.3	19.4	1,000	%	
6	10	51	4	25	96	10,776	数	枕草子
0.6	0.9	4.7	0.4	2.3	8.9	1,000	%	
107		4			111	2,747	数	讃岐典侍日記
39.0		1.5			40.4	1,000	%	
39	31	231		3	304	20,276	数	宇治捨遺物語
1.9	1.5	11.4		0.1	15.0	1,000	%	

※ 動詞合計は、各作品に於ける動詞の延べ語数。
 %は、動詞合計に対する各語の割合。

[図1]



「たてまつる」の三語で全体の約八五%から九八%を占めていたのに対して、『讃岐』に関しては、「まゐらす」が九六・四%を占め、『宇治捨遺物語』（以後『宇治』と示す）に関しては、「たてまつる」で七六%を占める形となる。これらは、明らかに時代の変化と共に使用される語が変化していることを示しているといえる。十世紀末から十一世紀初めの三作品において「きこゆ」「たてまつる」が主に使用され、十二世紀初めの『讃岐』、十三世紀の『宇治』で「きこゆ」がほとんど使用されなくなっている。また「まゐらす」は、「きこゆ」とは反対に三作品では数例しかみられなかったのに、『讃岐』ではそのほとんどを占め、『宇治』でも十二・八%の使用がみられる。このことから十一世紀後半頃勢力が変化しているようである。

また『宇治』については、他の和文系の作品と違って文体が和漢混淆の体であるので、「たてまつる」と「まうす」で約八五%の使用は、非和文系の文章としての特徴の現れといえるだろう。

第二節 各作品に於ける使用頻度数

i 『源氏物語』

「きこゆ」と「たてまつる」の使用頻度数の多さが目立つ。二語で勢力を二分しながら全体の九四・六%を占める。また、他作品と比べても「きこゆ」の使用頻度数が多いのは『源氏』の特徴といえる。

続いて「地の文」と「会話文」での使用をまとめたのが

[表3]

源氏物語					作品	
まゐらす	まうす	たてまつる	きこえさす	きこゆ	数	地の文
1	27	933	20	1075		
100	50.9	67.3	18.9	75.5	数	会話文
0	26	453	86	349	%1	
0	49.1	32.7	81.1	24.5	数	合計
1	53	1386	106	1424	%2	
0.03	1.8	46.7	3.6	47.9		各語全体
地の文			会話文		の比	
2056 (69.2%)			914 (30.8%)			

※ %1は、一つの語の中の「地の文」「会話文」の占める割合。%2は、作品での各語の占める割合。

表3である。全体的に「地の文」での使用が多いが、「きこえさす」のみ「会話文」での使用が多く、約八割を占める。これは、^註森野宗明氏が動詞の「きこゆ」「きこえさす」について——「きこえさす」は、「きこゆ」に対して最高敬語の関係になるが、成立はおくれたらしい。(中略)地の文では「きこゆ」専用で、会話文でのみ、待遇の評価の強弱の度を反映した「きこえさす」、「きこゆ」が対立、言い分けられるにとどまっていたのである。会話に集中するという点で、「きこえさす」は、かなり情意性の強い語であったと考えられる。——と述べられているように、補助動詞「きこえさす」についても、「会話文」に於いて待遇関係の差、特に敬意を高める為に使用されたのであろう。次に各語を活用形別に使用されると表4のようになる。これ

でわかるのが、圧倒的に連用形が多いということである。そこで、連用形の用例をみてみると、

1作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。(桐壺)

1は、源氏が元服した後、左大臣が婿として自邸に迎えてもてなすという場面で、動作の為手左大臣への敬意として尊敬語「たまふ」が使われている。このように動作の為手への尊敬語「たまふ」を伴った形は、表4-1のように各語とも高い割合を示す。これは敬語の使用が場面による人物相互の関係を区別するのに必要であった為に出た一つの

[表4]「源氏物語」活用形分類

活用形	未然	連用	終止	連体	已然	命令
きこゆ	175	981	108	117	41	2
きこえさす	15	69	8	14	0	0
たてまつる	335	733	138	148	22	10
まうす	9	36	5	3	0	0
まゐらす	0	1	0	0	0	0

[表4]-1「源氏物語」連用形

活用形	連用	給ふ	%
きこゆ	981	729	74.3
きこえさす	69	38	55.1
たてまつる	733	351	47.9
まうす	36	28	77.8
まゐらす	1	1	100

傾向であらう。

最後に「まゐらす」の使用についてだが、「動詞+まゐらす」の形で、「まゐらす」が補助動詞か本動詞か迷ったが唯一、一例みられた。

2あまり知らず顔ならんもひがひがしうなめげなり、と思しおこして、ほのめかしまゐらせたまふをりをりもあるに、(宿木)

女二の宮との縁組を薫が申し出ることを帝が期待しているのを、薫も知らぬ顔も出来ない、進まぬ心を奮い起こして帝に女宮をいただきたいと、ほのめかし申し上げる折々もある、という意である。これは、為手薫、受手帝で、他の例のように「物」が存在せず、「くを差し上げる」意の謙讓の動詞とは考えられず、補助動詞とする。

以上のようなことから『源氏』に於ける「まゐらす」の使用は、一例で、「地の文」での使用となる。

ii 『落窪物語』

「たてまつる」の使用頻度数が多い。「きこゆ」の使用頻度数の割合は『源氏』に比べると少ないが、「きこゆ」と「たてまつる」で勢力を分けていたと思われる。

「地の文」と「会話文」での使用は表5を見てもらうとわかるが、「会話文」での使用が多い。これは、もともと作品が継子いじめの説話を元にしていて、作品全体の「会話文」の割合が多く、謙讓の補助動詞が「会話文」に占める割合も多くなったものと考えられる。

「まゐらす」の使用は二例でその一例は、次の例である。

[表5]

落窪物語					作品	
まゐらす	まうす	たてまつる	きこえさす	きこゆ	語	
0	0	56	0	12	数	地の文
0	0	33.7	0	24.0	%1	
2	3	110	6	38	数	会話文
100	100	66.3	100	76.0	%1	
2	3	166	6	50	数	合計
0.9	1.3	73.1	2.6	22.0	%2	
地の文		会話文			各語全体	
68 (30.0%)		159 (70.0%)			の比	

3 中納言「…御帯もさらにかゝる翁の身には、闇の夜に侍(る)べければ、かへしまゐらせんと思ひ給ふれど、…」(巻之三)

中納言(忠頼)が衛門督(道頼)へ手紙の返事を書いた中の一節で、中納言から頂いた御石帯も自分のような老人の身には、闇夜に錦を着たようなものでございますからお返し申し上げようと存じます、という意である。

これは御石帯という「物」が、返す対象物として存在するが、一度頂いた物を再び同一人物に差し上げるといふことではないので、謙譲の動詞ではなく、やはりこれは謙譲の補助動詞として、「お返し申し上げよう」とした。

このように、「まゐらす」は、二例、「会話文」に使用されている。

iii 『枕草子』

「たてまつる」が最も多い使用頻度数を示し、それに「きこゆ」が次ぐかたちで、二語で全体の八割近くを占め、『落窪』に似た傾向を示す。また、「まうす」の使用頻度数の割合が『源氏』や『落窪』に比べて多い。これは、註森野宗明氏が動詞「まうす」について「主体下位意識からは、客体に対する臣従的態度の端的な表出に適しており、「おほせらる」の場合同様、『枕草子』のように、同じく女性の文章でも、「まうす」偏重の作品を生むことにもなった。とあるように、謙譲の補助動詞「まうす」についても、作者の臣従的主体下位意識が強くからみついて使用が多くなったものと思われる。

ところで、表1からは『源氏』や『落窪』と特別に違った傾向はみられなかったが、表2に於いて動詞全体に体する割合を見ると、五作品で最も少ないのがこの『枕』である。これは、『枕』が大きく(1)類聚的な段、(2)日記的な段、(3)随想的な段の三つに分けられ、謙譲の補助動詞の使用が宮廷生活の話が中心となる(2)日記的な段に集中しているために、謙譲の補助動詞の、作品全体の動詞に対する割合が少なくなっているのではないかと思われる。

「地の文」と「会話文」での使用は、表6より、全体として「地の文」の使用が多い。「まうす」は、「会話文」での使用が多いがこれは「まうす」が、臣従的主体下位意識が強くからみついて使用されたいと述べたように、『源氏』の「きこえさす」同様「会話文」で待遇関係の差

[表6]

枕 草 子					作 品	
まゐらす	まうす	たてまつる	きこえさす	きこゆ	語	
6	3	39	3	12	数	地の文
100	30.0	76.5	75.0	48.0	%1	
0	7	12	1	13	数	会話文
0	70.0	23.5	25.0	52.0	%1	
6	10	51	4	25	数	合 計
6.3	10.4	53.1	4.2	26.0	%2	
地の文			会話文		各語全体	
63 (65.8%)			33 (34.4%)		の 比	

を出すために、特に使用されたものと思われる。

「まゐらす」については、六例が補助動詞として使用されているようである。しかし、索引では七例と次の例も挙げてある。

4 桜の汗衫、萌黄、紅海などいみじう、汗衫長く引きて、取次ぎまゐらす、いとなまめきをかし。(一〇〇段)

4 は、朝の御手水を淑景舎に差し上げる場面、御手水を運ぶ童女の着物姿の説明があり、その後「取次ぎまゐらす」とある。御手水を運ぶのは童女と下仕えと記してあるので、それを直接淑景舎に渡すことはないであろうから女房が下仕えの手から受け取って淑景舎に差し上げるといふ意にとるほうが適当であろう。よって、この例は謙讓の動詞であり、補助動詞の例から省いた。

[表7]

讃岐典侍日記					作 品	
まゐらす	まうす	たてまつる	きこえさす	きこゆ	語	
78		3			数	地の文
72.9		75.0			%1	
29		1			数	会話文
27.1		25.0			%1	
107		4			数	合 計
96.4		3.6			%2	
地の文			会話文		各語全体	
81 (73.0%)			30 (27.0%)		の 比	

以上により、「まゐらす」は六例で、全て「地の文」で使用である。

iv 『讃岐典侍日記』

「まゐらす」の使用頻度数が多く、一語で全体の九六・四％を占める。「きこゆ」「きこえさす」「まうす」の使用は見られない。「たてまつる」がわずかに四例だけ使用されている。十二世紀に入り、前の三作品とは、謙讓の補助動詞で使用される語が変化してきているようである。表2の動詞全体に対する割合は、作品の大きさにしては『源氏』に次いで四〇・四％と高い数値を示している。これは、その内容が堀河・鳥羽帝への宮仕えが中心となっている為に、自然に敬語の使用量が増えたものと考えられる。

「地の文」と「会話文」については、表7から「地の

[表 8]

宇治拾遺物語					作 品	
まゐらす	まうす	たてまつる	きこえさす	きこゆ	語	
10	8	94	/	0	数	地の文
25.6	25.8	40.7		0	%1	
29	23	137		3	数	会話文
74.4	74.2	59.3		100	%1	
39	31	231		3	数	合 計
12.8	10.2	76.0	1.0	%2		
地の文 112 (36.8%)		会話文 192 (63.2%)		各語全体 の 比		

文」での使用が多い。

v 『宇治拾遺物語』

「きこゆ」の使用が三例で全体の1%しかない。また、「きこえさす」の例は一例もない。『源氏』が書かれて約二百年たち、「讃岐」では使用が見られない点と合わせて、『宇治』の頃には、「きこゆ」系が使用されなくなっているのうかがえる。

「たてまつる」に加えて「まうす」の使用がやや多いのは、「きこゆ」系の衰退の為だけでなく、一節でも述べたように文体が和漢混淆の体であるので、中古の和文系では避けられた硬いひびきをもつ「たてまつる」と「まうす」の使用が増えたのだろう。

動詞全体に体する割合は、15%と『枕』に次いで低く、

これはこの作品が説話集であるが故に『源氏』のような作者による人物関係への細かな配慮を必要としなかった為ではないだろうか。

「地の文」と「会話文」での使用は、表8からわかるように「会話文」での使用が多い。これは、この作品が伝承された説話を編集して出来ていることから、おそらく作品全体の「会話文」の量が多く、謙譲の補助動詞の使用も、「会話文」での使用が多くなったものと考えられる。

「まゐらす」の使用については、『讃岐』のような極端な使用はないが、「きこゆ」系と入れ替わるかのように使用数を伸ばしているようである。

第二章 待遇関係

i 『源氏物語』

各語を比較しながら、待遇関係を見ていきたいと思う。敬意の受手側を、人物や位でまとめたのが次の表9-1で、さらに待遇の基準をそろえるために作者に限定したのが「地の文」での敬意で表9-1Ⅱになる。

「きこゆ」と「たてまつる」が、上位の神仏から朝廷、皇族、殿上人、それに無位無名の不特定の一般の人々まで幅広い階層に使われている。勢力を二分していたが、待遇関係の違いから区別されていたのではないようである。

「きこえさす」は、特に「地の文」での敬意を見てもらうとわかるが、受手側が帝や院、宮、源氏等身分の高い方に限られ、その他の一例も、内大臣への敬意で高かったよ

[表9-1] 「源氏物語」に於ける待遇関係・全体

人名・位	きこゆ	きこえさす	たてまつる	まうす	まゐらす
神 仏	11	0	22	3	0
朝 廷	1	0	4	1	0
帝	13	2	37	4	1
院	22	4	42	5	0
東 宮	12	4	27	0	0
后・女御	88	4	73	4	0
源 氏	281	17	231	11	0
宮	102	15	116	5	0
匂 宮	88	10	88	2	0
薫	61	8	68	2	0
夕 霧	36	2	31	0	0
紫の上	86	1	94	1	0
女三の宮	68	7	77	0	0
落葉の宮	41	2	41	0	0
玉 鬘	64	1	64	1	0
浮 舟	35	7	61	0	0
尼	16	0	7	0	0
女 房	2	1	1	0	0
人(々)	7	0	3	0	0
そ の 他	403	27	334	14	0

うである。もともと「きこえさす」の語構成自体が、「言う」の謙讓語「きこゆ」の未然形「きこえ」に、使役の助動詞「さす」のついたもので、人を介してさせるということで敬意を表し、「きこゆ」に比べて敬意が高かったことが予想されたように、身分のある人々に限って使用されたようである。

「まうす」に関しては、ほとんどが男性の使用で、しかも改まった意を表すときに使用され、身分の高い人へはもちろんだが、主体・客体間に身分の隔たりがあるときに使

[表9-2] 「源氏物語」に於ける待遇関係・「地の文」

人名・位	きこゆ	きこえさす	たてまつる	まうす	まゐらす
神 仏	7	0	17	1	0
朝 廷	0	0	1	1	0
帝	12	2	28	4	1
院	16	4	28	2	0
東 宮	12	3	25	0	0
后・女御	74	0	50	3	0
源 氏	246	5	189	5	0
宮	76	4	80	3	0
匂 宮	72	1	67	2	0
薫	42	0	39	1	0
夕 霧	28	0	30	0	0
紫の上	69	1	65	1	0
女三の宮	48	1	56	0	0
落葉の宮	32	0	24	0	0
玉 鬘	48	0	36	0	0
浮 舟	4	0	21	0	0
尼	7	0	3	0	0
女 房	1	0	0	0	0
人(々)	5	0	2	0	0
そ の 他	288	1	200	4	0

用されている。

「まゐらす」は一例だけとはいえ、帝に対してしようざれていることから、かなり高い敬意で使用されているといえる。

ii 『落窪物語』

『源氏』と同様に「きこゆ」「たてまつる」が広い階層で使われ、「きこえさす」が高い謙讓意識のときに特に使われている。ここで、神仏や帝への敬意がないのに敬意が高いというのは、物語が『源氏』と違って宮廷生活が中心に

【表10】「落窪物語」に於ける待遇関係

人名・位	きこゆ	きこえさす	たてまつる	まうす	まゐらす
帝	0	0	3	0	0
中宮	0	0	2	0	0
道頼・少将	5	0	16	0	0
中将	1	0	5	0	0
衛門督	1	1	3	1	1
大納言	0	0	1	0	0
大将	1	1	3	0	0
左大臣	0	1	3	0	0
忠頼・中納言	3	0	18	0	0
大納言	1	0	4	0	0
落窪	24	2	56	2	1
北の方	2	0	13	0	0
三の君	0	0	12	0	0
四の君	2	0	9	0	0
落窪の子供達	1	0	8	0	0
女房達	2	0	5	0	0
その他	7	1	16	0	0

なっておらず自然と敬意を受ける側が限られてくる。「きこえさす」の敬意は、道頼と女君（落窪の君）と河漕の和泉守邸の叔母に限られる。しかも道頼、女君への使用は、物語も半ば過ぎ、地位を確立したのちでの使用で、為手が中納言など道頼からの庇護を受ける側で、身分の格差が歴然としているので謙讓意識は高かったものとみられる。また河漕が叔母に使用している例も、叔母に援助を願っている文での使用で、阿漕が恐縮している分敬意は高くなっ

ているといえよう。

「まうす」「まゐらす」については、用例が少ないので判断し難いが、道頼や落窪の君への敬意で、高かったものといえる。

iii 『枕草子』

「きこゆ」「たてまつる」「まうす」が広い階層で使われているのがわかる。ただ為手と受手の身分関係を見ていると、

5 中宮「…問ひ聞えさせ給ふを、…」 (二一段)

為手村上 帝 受手宣耀殿の女御

6 中宮「見送り聞えむ」 (二〇〇段)

為手中宮定子 受手淑景舎

7 うらみ聞えて、 (一三三段)

為手藤三位 受手一条帝

8 取らせ奉り給ふよ、 (二二四段)

為手関白 受手権大納言

「きこゆ」と「たてまつる」では、為手（主体）の方が身分が高い場合が、「きこゆ」にはかなりあり「5・6」「たてまつる」にもみられる「8」。また為手と受手の身分格差があまりない場合の使用もある「5・6」。

ところが「まうす」の用例をみてみると、

9 女法師「…とり申しつれ」 (八三段)

為手女法師 受手仏

10 語り申し給ひければ、 (二二八段)

為手頭の弁 受手道隆

11 ただ責めに責め申し、
(一三三段)

為手藤三位 受手一条帝

9、10、11のように、必ず為手の方が身分が低く、しかも身分格差があるときに使用されている。^註森野宗明氏が、――主従関係といった身分上の格差が極端に大であり、その支配下に隷属しているものとしてとらえられる客体に対する下位者の動作等の叙述に集中している。――と述べられているように、『枕』では、この「臣従の下位意識」をあらわすために、女性層では敬遠されがちな「まうす」を使用し

[表11] 「枕草子」に於ける待遇関係

人名・位	きこゆ	きこえさす	たてまつる	まうす	まゐらす
神 仏	0	0	6	1	0
帝	2	1	8	1	1
院	0	0	0	1	0
后・女御	8	3	14	1	5
宮	0	0	2	0	0
関 白	0	0	7	1	0
大 納 言	2	0	3	0	0
中 納 言	1	0	0	0	0
大 夫	0	0	1	0	0
中 将	3	0	4	1	0
頭 の 弁	1	0	3	0	0
作 者	6	0	1	3	0
女 房	1	0	0	0	0
そ の 他	2	0	6	1	0

[表12] 「讃岐典侍日記」に於ける待遇関係

人名・位	たてまつる	まゐらす
神仏	0	2
帝・堀河	2	77
鳥羽	1	11
仁明	0	1
院・後冷泉	0	1
後三条	0	1
白河	0	1
后	0	1
内侍	0	1
関白(忠実)	0	1
摂政殿	0	3
中将(忠通)	0	2
藤三位	1	0
作 者	0	5

ているといえるだろう。

「きこえさす」と「まゐらす」は、ほぼ同じ勢力で、帝、中宮、女院といった限られた人々に使われ、かなり高い謙讓意識を示していた。

iv 『讃岐典侍日記』

「まゐらす」は『源氏』や『枕』の例から、帝や院、后など、かなり高い謙讓意識の表現として使用され始めているが、この『讃岐』では、中心は帝、院への使用であるが、敬意は高いが、それ以外の殿上人や作者にも使用されている。

v 『宇治拾遺物語』

「たてまつる」が最も広い階層で使われ、「まうす」が主従関係など身分格差があるときに使用された。

「まゐらす」は、帝や皇族に限られた使用でなくなっている。『讃岐』よりも広い階層で使われている。

[表15]

作品	語	動作表現語			精神表示語		
		数	%1	%2	数	%1	%2
源氏物語	きこゆ	790	55.5	36.0	634	44.5	81.8
	きこえさす	55	51.9	2.5	51	48.1	6.6
	たてまつる	1307	94.3	59.5	79	5.7	10.2
	まうす	42	79.2	1.9	11	20.8	1.4
	まゐらす	1	100	0.05	0	0	0
落窪物語	きこゆ	16	32.0	9.2	34	68.0	64.2
	きこえさす	4	66.7	2.3	2	33.3	3.8
	たてまつる	150	90.4	86.2	16	9.6	30.2
	まうす	2	66.7	1.1	1	33.3	1.9
	まゐらす	2	100	1.1	0	0	0
枕草子	きこゆ	18	72.0	22.0	7	28.0	50.0
	きこえさす	4	100	4.9	0	0	0
	たてまつる	51	100	62.2	0	0	0
	まうす	8	80.0	9.8	2	20.0	14.3
	まゐらす	1	16.7	1.2	5	83.3	35.7
讃岐典侍	きこゆ						
	きこえさす						
	たてまつる	4	100	4.2	0	0	0
	まうす						
	まゐらす	92	86.0	95.8	15	14.0	100
宇治拾遺	きこゆ	2	66.7	0.7	1	33.3	3.6
	きこえさす						
	たてまつる	219	94.8	79.3	12	5.2	42.9
	まうす	24	77.4	8.7	7	22.6	25.0
	まゐらす	31	79.5	11.2	8	20.5	28.6

※ %1は、一つの語の中でのそれぞれの占める割合。
%2は、各作品での各語の占める割合。

[表13]「宇治拾遺物語」に於ける待遇関係

人名・位	きこゆ	たてまつる	まうす	まゐらす
神 仏	0	136	5	10
僧・聖・上人等	0	18	7	5
朝 廷	0	4	0	0
天 皇	0	1	0	3
王 様	0	1	0	0
皇太子	0	7	0	0
后	0	8	0	0
位・名のある人	1	27	12	18
その他	2	24	7	3

但し、為手と受手
 12女「…いかでか、おろかには思い参らせん。…」
 (二〇八)
 為手(親が昔仕えた)女 受手(親に先立たれた)女
 12のように、名もない女へも使われている。

[表14]

作 品	動作表現語	精神表示語
源氏物語	2195 (73.9%)	775 (26.1%)
落窪物語	174 (76.7%)	53 (23.3%)
枕草子	82 (85.4%)	14 (14.6%)
讃岐典侍日記	96 (86.5%)	15 (13.5%)
宇治拾遺物語	276 (90.8%)	28 (9.2%)

の関係を見ると、親同士の主従関係が女同士にも残っているようで、そこにあらわれる敬意は高かったようである。つまり、「まゐらす」は、他作品同様謙讓意識は高いものとして表現されているが、その使用範囲が、一般の人にも敬意が向けられるようになってきているといえる。これはまた、

[表16] 源氏物語「きこゆ」

上接語	頻度数
1 思ひ※	279
2 恨み※	42
とぶらひ	42
3 もてなし	37
4 思ひ出で※	34
教へ	34
5 頼み※	33
6 譲り	26
7 語らひ	24
語り	24
8 尋ね	23
9 めで※	22
10 そそのかし	21
11 かしづき	20
12 待ち	19
13 答へ	18
許し	18
14 扱ひ	17
15 恋ひ※	16
16 訪れ	14
17 馴れ	13

「たてまつる」

上接語	頻度数
1 見	582
2 見え	75
3 見せ	39
4 入れ	34
渡し	34
5 知らせ	18
はじめ	18
6 後れ	15
7 参ら・せ	13
8 知ら・れ	12
似	12
9 置き	11
書か・せ	11
10 得	9
聞かせ	9
据ゑ	9
11 下ろし	8
せ・させ	8
まかで・させ	8
別れ	8
12 念じ	7

「きこゆ」系の衰退に伴って、「まるらす」が勢力を広げていった表れともいえる。「きこゆ」は、身分関係というよりも、為手の受手への恋情などからあえて使用されている。

第三章 上接語

各作品の上接語を動作表現語と精神表示語に分け、その割合を示したものが表14である。動作表現語を上接する語が圧倒的に多い。ところが表15で各語を見てみるとその傾

向がまた違ってくる。先ず%1を見てみると、『源氏』の「きこゆ」「きこえさす」では、全体の割合に比べ精神表示語が四四・五%、四八・一%と大きくなり、『落窪』の「きこゆ」、『枕』の「まるらす」では、それぞれ六八%、八三・三%と逆転している。次に%2を見てみると、動作表現語では、「たてまつる」(『讃岐』は「まのらす」)が高く、精神表示語では「きこゆ」の割合が高くなっている。このことから、「たてまつる」が動作表現語に承接し易く、「きこゆ」が精神表示語に承接し易いと予想される。そこで

「きこゆ」と「たてまつる」の上接語をもう少し詳しく見てみたいと思う。「きこゆ」と「たてまつる」の上接語を使用頻度数の高いものから並べたのが次の表16である。(比較し易いよう、『源氏』の用例を使用)これでわかると思うが、使用頻度数が高い語に於いて、「きこゆ」と「たてまつる」の上接語で重なるものはない。しかも「きこゆ」には精神表示語が見えるが、「たてまつる」には一語も見えない。但し、

[表18]

上接語	頻度数
思ひ	3
推しはかり	1
思ひやり	1
取り次ぎ	1

このことは、「たてまつる」に数多く上接する語が、「きこゆ」に全く上接しないということを示しているのではない。それぞれの上接語が、それぞれ「きこゆ」「たてまつる」により上接

体的な数の割合では表れてこないが、使用頻度数の多いものを挙げてみると、精神表示語が「きこゆ」に上接する場
 合が多いことがわかる。
 次に、『枕』の「まゐらす」でも精神表示語の割合が多かったで、その上接語を見てみたいと思う。表18の通りである。『枕』の「まゐらす」は、前に述べたように、「ま

[表17]「きこゆ」「たてまつる」の比較

上接語	きこゆ	奉る
思ひ※	279	1
恨み※	42	2
とぶらひ	42	0
もてなし	37	2
思ひ出※	34	3
教へ	34	4
頼み※	33	1
譲り	26	0
語らひ	24	0
語り	24	0
尋ね	23	1
めで※	22	4
そそのかし	21	1
かしづき	20	6
待ち	19	0
答へ	18	0
許し	18	1
扱ひ	17	1
恋ひ※	16	2
訪れ	14	0
馴れ	13	2

し易いということである。そこで次に、各上接語の「きこゆ」「たてまつる」に上接する数を比較してみたいと思う。比較する上接語は、前に挙げた使用頻度数の高いものである。
 表17より「きこゆ」に上接する数が多いものは、「たてまつる」に上接しにくく、「たてまつる」に上接する数が多いものは、「きこゆ」に上接しにくい。「きこゆ」と「たてまつる」は相互に排除しながら上接語に承接していることがわかる。また、上接語が、もともと異なり語数が動作表現語の方が多いので、全

上接語	奉る	きこゆ
見	582	7
見え	75	3
見せ	39	1
入れ	34	0
渡し	34	6
知らせ	18	0
はじめ	18	1
後れ	15	7
参ら・せ	13	0
知ら・れ	12	1
似	12	0
置き	11	0
書か・せ	11	0
得	9	0
聞かせ	9	0
据ゑ	9	0
下ろし	8	0
せ・させ	8	0
まかで・させ	8	0
別れ	8	1
念じ	7	4

ゐらず」の使用され始めた具体的な例の初めといえる。だから、その段階で「まゐらず」が精神表示語に承接し易いとなると、これは「きこゆ」の勢力範囲に入っているといえる。つまり待遇関係に於いて、「きこゆ」系の「きこえさす」と、ほぼ同じ高い敬意で使用されたのと同時に、その上接語に於いては、「きこゆ」に上接し易い精神表示語に承接している。「きこゆ」の衰退と、「まゐらず」の伸張は、相対的に進行しているといえる。

以上、上接語の特徴としては、「きこゆ」と「たてまつる」が相互に排除しながら、上接語に承接しているということが挙げられる。また、「まゐらず」の伸張する様子が、上接語の種類からもうかがえた。

結び

今まで各作品各語ごとに、使用頻度数、待遇関係、上接語について考察してきたわけだが、ここではその三点を合わせて考え、各語の性質についてまとめる。

「きこゆ」は、『源氏』の使用量の多さが、他の作品と比較しても多く、これは森野宗明氏が、「きこゆ」系のよくな婉曲感を喚起しやすい語が活発に用いられたその背景には、たしかに、王朝貴族社会の優美典雅を好む、情緒豊かな生活態度、生活様式のありようをみるべきであろう」と、述べられているように、「きこゆ」の性質が、『源氏』に描かれる王朝貴族社会の文化に、あっていたのであろう。いずれの作品にしろ、中古、「きこゆ」の使用が全盛期で

あったのは確かで、十二世紀に入ると衰退し、中世ではほとんど使用されなくなる。使用は広い階層に向けて使用される。また上接語は、「たてまつる」と相対的に使用され、特に「思ひ」に代表される精神活動を表す動詞に承接する。「きこえさす」は、「きこゆ」ほど使用量は多くないが、高い敬意で使用される。上接語は、「きこゆ」と似た傾向を示し、その使用時期も、「きこゆ」と共に、十二世紀に入ると使用されなくなる。

「たてまつる」は、『讃岐』を例外として、どの作品でも高い使用頻度数で、時代の変化に変わらず使用される。敬意は、神仏、天皇から、名もない一般の人々と最も広い階層に向けて使用される。上接語は、「きこゆ」と相対的に、身体的動作のように具体的外在的で客体への働きかけが直接とらえられやすいような動作を表す動詞に承接する。特に、「見」に承接する例が多かった。

「まうす」は、これも『讃岐』は例外としなければならぬが、各作品、使用量は多くないが使用されている。待遇関係に於いて、主体と客体の身分の格差が大きく、主従関係にある人物間で使用される。

「まゐらず」は、中古の半ば過ぎまでは、使用例が少なく、十二世紀に入り、『讃岐』のように使用量が多く、また『宇治』でも使用量が中古の作品よりあることから、十一世紀後半から、「まゐらず」が伸張してくるようである。敬意は、使用されはじめた頃は、帝や皇族などかなり高い敬意の表現として使用され、中世の作品では、敬意は高いよ

うだが、使用される階層が広くなっている。また、上接語ははじめ「思ひ」など精神表示語につき易かったが、『讃岐』では、「思ひ」と共に「見」にかなり承接している。これらは、「きこゆ」「きこえさす」の衰退と重ねて考えると、「まゐらす」が先ず、「きこえさす」の敬意の高い階層に勢力を伸ばし、さらに「きこゆ」の勢力まで範囲を広げ、上接語については「たてまつる」の範囲にもわたつていといえる。このように、「きこゆ」系の衰退と、「まゐらす」の伸張は表裏となって進行したといえるだろう。

以上、五作品五語について考察を試みたが敬語史的なものまでは、調査作品・量の不足で、確定的なことはいえないと思うが、この五作品に於けるといふことで、私なりに考察出来たと思う。初めにも書いたように、為手の動作を表す動詞につけて、受手に敬意を示すという、二段構えをとるこの謙讓表現に、密接に関わってくる人間の心理が印象に残った。

註

森野宗明 「古代の敬語Ⅱ」

〔講座国語史5敬語史〕大修館書店

参考文献

◇森野宗明 「古代の敬語Ⅱ」

〔講座国語史5敬語史〕大修館書店

◇宮地 裕 「源氏物語・枕草子の敬語」

〔敬語講座第2巻上代・中古の敬語〕明治書院

◇築島 裕 「日本語の文体」

〔岩波講座日本語10文体〕岩波書店

◇宮地達夫編 『古典対照語い表』

笠間索引叢刊4

統計表(2)品詞別統計 笠間書院

◇江口正弘 『落窪物語』の語彙と文体についての一考察

〔国文学叢〕第五十五号抜刷 昭和四十六年二月

◇辻村敏樹 「敬語の変遷のとりえ方・中古」

〔月刊文法〕四三年一二月 明治書院

◇杉崎一雄 「謙讓語」

〔月刊文法〕四三年一二月 明治書院

◇永江和子

「謙讓の補助動詞に関する一考察」

—平安鎌倉期の和文資料による—

〔熊本女子大学 二十三回生 卒業論文〕

◇徳永京子 「源氏物語」における謙讓の補助動詞の研究

〔熊本女子大学 二十七回生 卒業論文〕

